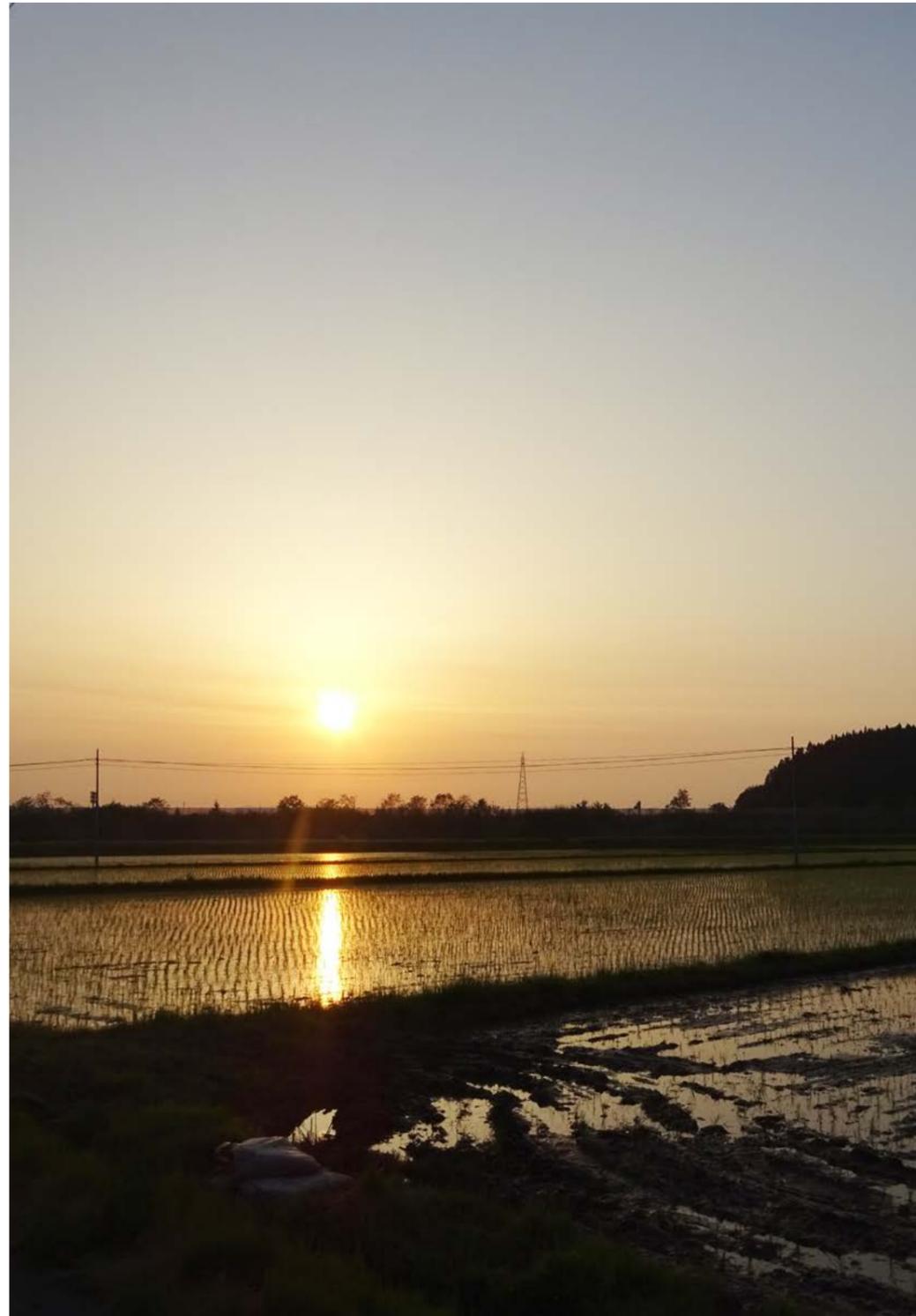


田んぼと油田

3

留学生がみた豊川地区





山田の盆踊り会場前に広がる田んぼ。写真は笛や太鼓の練習を始めた5月中旬に撮られたもの。手前の道の先には山があるため、時にはあぜ道に熊の足跡が見られることも。まだ植えられたばかりの苗の上にゆっくりと日が沈む

県庁所在地である秋田市から車で30分ほど。細くなっていく道を、広がる田んぼに押し出されるように進んでいくと、いつしか道は上り坂になり、気づけば檜がぼつんとたたずむ丘の上に。

秋田市に隣接しベッドタウンとして栄える湯上市^{かたがみ}の中で、三方を山と森に囲まれ「行き止まり集落」と呼ばれる豊川地区。そんな豊川地区を留学生と一緒に訪ねはじめたから、早三年がたちました。

かつては天然アスファルト、油田で栄え、多くの人々を集めたまち。農聖・石川理^{いしかわり}紀之助^{きのすけ}が活躍し、遥か九州までその名が知られたまち。今は人々が去り、日本のすべてのまちと同じように過疎化に直面しているまち。まちを去る若者とめることができない中で、一年前、ある集落からこんな声が上がりました。

「いまさら、若者を呼び込む大がかりな町おこしなんてできない。
それならばせめて、今ここに住んでいる自分たちが楽しめることをしたい」

そこで浮かび上がってきたのが、かつての農村で最大の娯楽であったという盆踊りの復活です。今回は、豊川地区の一集落で昨年十年ぶりの復活を遂げた「山田の盆踊り」を、秋田大学に所属する9地域26名の学生とともに追いかけてきました。これは、盆踊り復活の経緯と、復活に関わった人たちへのインタビューを通して見つけた豊川の魅力をまとめた記録です。

朝から晩まで農作業に追われる日々の中で、新年から皆が心待ちにしたというお盆。その中心にあった盆踊りは、今でも人々の体に刻み込まれています。腹に響く太鼓の音と、軽やかな笛の音。お年寄りから若い人まですべてが集まり、普段とは違う皆の姿に心がざわめく一夜。しかし、復活を遂げた盆踊りは、そんな記憶の中の盆踊りとは少し異なる新たなお祭りでした。

少し足を止めて豊川を、そして、皆さんの周りにあるすべてのまちの物語を留学生と一緒に眺めてみませんか。



軽トラに紅白幕をはった檜の上には笛太鼓のお囃子部隊。ただし、こちらも地元の山田の人だけでなく、5月から練習を始めたばかりの「よそ者」組が半数。即席のお囃子部隊と即席の踊り子たち。しかしお囃子が鳴り始めれば容赦なく盆踊りは始まる。日が暮れるまで、汗をかきながら輪は回る

盆踊りの祭りを始める前に、山田の皆さんに踊り方を習う。山田には全く動きの異なる三種類の踊りがあるため、皆必死で先生の手つき、身のこなしを真似る。踊りながら前に進むことが意外に難しい。稲が伸びた田んぼの前で30分練習



山田の皆さんに盆踊りについてインタビューを行った11月。稲刈りもとうに終わり、早くも雪の気配がする豊川で、再びみんなで盆踊り。夏の盆踊りに参加できなかった学生も、見よう見まねで輪を作る。往年の盆の祭りを思い出させるような、総勢40名近くの踊りの輪が完成

田んぼと油田の町、豊川へようこそ！

イラスト＝平田早季

湯上市は、県庁所在地がある秋田市の北西に位置する人口約34500人の町。1970年代からベッドタウン化が進み、県内市町村で現代まで最も人口増加を続けていた区域です。その中でも豊川地区は、明治時代に天然のアスファルトの産地として全国に名の知られた存在で、我が県第一号の特産品とし

て期待を寄せられていました。その後、油田の操業が開始され、一時は他県からも移住者を集めました。石油の採掘は大正10年にピークを迎えて以降縮小の一途をたどり、2001年に原油の生産が完全に停止。ひとつの時代に終わりを告げることになりました。その後、地元保存会の活動も実り、2007年11

月30日には経済産業省から「近代化産業遺産群」に認定。また2009年5月10日には、天然アスファルトの地質露頭の存在が認められ、日本の地質百選にも認定されました。こうした輝かしい歴史を持つ豊川地区ですが、現在の状況は必ずしもかんばしいものとは言えません。いわゆる「行き止ま

り集落」であることは、他の地域への交通アクセス改善とともに、地域住民の他出、進学・就職による転出が相次ぎ、2012年には地域文化継承の拠点でもあった湯上市立豊川小学校が135年の歴史にピリオドを打ちました。しかし、その跡地には「豊川コミュニティセンター」がお目

見え。現在は、豊川が生んだ「農聖」石川理紀之助の功績を伝える「郷土文化保存伝習館」や、かつての繁栄を伝える「豊川油田展示室」とともに、地域のシンボルとして住民たちの活動拠点になっていきます。深刻な人口減少問題に直面する秋田の地で、豊川地区は新たな時代を歩み始めています。

くさきだに 草木谷

里山にある石川理紀之助翁ゆかりの農地。主に環境学習のために用いられている。NPO法人「草木谷を守る会」（代表：石川紀行）が、田植え・稲刈り体験などの環境学習、ホテル鑑賞会、その他各種イベントを不定期に開催している

「草木谷を守る会」
連絡先: kusakidani.mamorukai@gmail.com
住所: 秋田県湯上市昭和豊川山田字家の上62
ホームページ: <http://kusakidani.net/>
Facebook: <https://www.facebook.com/kusakidani>

かたがみ 湯上市多目的交流施設 (豊川コミュニティセンター)

豊川小学校跡地に建てられた多目的施設。地域コミュニティの新たな活動の拠点

電話: 018-877-4738
住所: 秋田県湯上市昭和豊川船橋字鈴木8-1
開館時間: 9:00~21:30
*施設の使用申し込みは、使用の3日前までに上記の連絡先へ

● = 山田の田んぼエリア
● = 豊川の主な田んぼエリア

湯上市郷土文化保存伝習館

石川理紀之助翁遺跡に併設された資料館。貴重な資料や遺稿が保存・展示されている

電話: 018-877-6919
住所: 秋田県湯上市昭和豊川山田字家の上64
営業時間:
4月~10月 9:00~16:30
11月~3月 9:00~16:00
休館日: 月曜日、祝祭日の翌日、年末年始 (12/28~1/3)

JR奥羽本線 大久保駅

ブルーメッセあきた

湯上市特産品を揃えた道の駅に、世界の花が鑑賞できる温室、レストランを併設

電話: 018-855-5041
住所: 秋田県湯上市昭和豊川竜毛字山ノ下1-1
営業時間: 9:00~18:00
(レストラン 花の大地は11:00~18:00)
休館日: 年末年始 (12/31、1/1)
URL: <http://www.blume-messe.com/index.html>

豊川油田 (豊川タールビット)

山中には櫓など、開発当時の施設の一部が残る。天然アスファルト層も露出しており、「豊川タールビット」の別名も。油田展示室では、天然アスファルトの採掘や油田発見、そこで働く人々にまつわる歴史を伝えている

電話: 018-877-2069
住所: 秋田県湯上市昭和豊川槻木真形尻56-2
*豊川油田展示室の見学を希望される方は「豊川油田の歴史を伝える会」(上記番号)までお問い合わせください

5月から始めた笛太鼓練習の一コマ。太鼓の叩き手は集落の男性。本来は青年会が中心になって行うものだが、過疎化が進み、伝統の継承が危ぶまれる。田んぼの正面にある盆踊り会場に、農作業の合間皆が集まる。10年ぶりに倉庫から出した太鼓は古びており皮が弱っていたため、これを機に新調。新たな太鼓の音が盆踊りの復活を告げる



留学生が聞いた、 豊川の人々の物語

豊川地区の一集落、山田。
農聖・理紀之助が晩年庵をおき
清貧生活を送ったこの地で、
昨年盆踊りが復活しました。
かつてのにぎやかな盆の記憶と
復活にかける思いを知るため、
9地域26名の学生が
山田の方々にお話を聞きました。
それぞれの話から浮かび上がる
山田、そして豊川の歴史や物語を
どうぞご覧ください。

山田の盆踊り復活に取り組む 石井善春さんを訪ねて

聞き手 沈鍾根(韓国)、千歳文(韓国)、李青松(中国)、
羊小慧(中国)、王妍(中国)



皆の質問1つ1つ丁寧に答えてくださった石井さん。盆踊りの復活については、当日の様子だけでなく、その準備段階についても、写真を見せ、指をさしながら説明してくださいました。「町内会」、「青年会」、「供養」、「集落」…。新しい言葉をたくさん学ぶことができました

山田の盆踊りが10年間も
開催されなかった理由とは

石井さんは山田の町内会長をされていますが、そもそも盆踊りとはどういうものですか？

石井 これはお盆の行事です。

お盆というのは仏教に由来する日本の風習で、亡くなった人をみんなでお迎えして供養する行事なんです。盆踊りには地域性があり、秋田県では北部の「馬内盆踊り」、中央地区の「一日市の盆踊り」、そして南部の「西馬音内盆踊り」が「三大盆踊り」と呼ばれているんですけども、豊川や周辺の町は「一日市」に似たような感じでやります。先祖の供養のためだけに、家族や地域のコミュニケーションの場でもあって。お盆の時期は仕事も学校もお休みになるから、遠くに住んでいる家族が供養のため帰省してくるんですよ。

踊り手はほとんど若者？

石井 昔はそう。でも、今は子どもたちや10代・20代の若者がとても少なく、昔ながらの盆踊りを知ってる人が高齢化している。参加者のほとんどが60代

と70代で、もう集落の人たちだけではやれないくらい人が減ってしまったんです。やっぱり大勢で盛り上がり始めて成り立つものなので、10人いるかどうかという人数ではちょっと盆踊りという感じがしない。それで山田では10年間も開催されない状態が続きました。

それは残念ですね……。

石井 子どもだけでなく大人まで家ぐるみで移転してしまうこともある。そういう中で、残っている人も盆踊りにあまり関心が向かなくなってきた。でもやはり、それだとさみしいよね。盆踊りは私が小さい頃からあった行事で、普段会えないような人とも一緒に楽しんで、人と人のつながりを強くしてくれるものでもあった。それで、何かの拍子に人を集めてまたやりましょうという話になり、「草木谷を守る会」を中心にして昨年あたりから呼びかけを始めたんです。

多少ヘタでも問題なし！
とにかく楽しむのが一番

「草木谷を守る会」って何で

踊りの魅力ですね。

山田の盆踊りはこれからどうなるのでしょうか？

石井 「やりましょう！」という積極的な若者がいたら大歓迎しますけども……なかなかなくて(笑)。今の若い人には他に楽しみたいものや夢中になるようなゲームがいろいろあって、それをやってるんでないかなと思います。でも、例えば「西馬音内盆踊り」では、熱心な人になると代々おばあさんからお母さん、そして子どもへと受け継がれていくそうです。私たちの盆踊りも地域の伝統だから、絶やさず毎年続けていきたい。とにかく現状では、少ない中でも団結すること。でも、集落の人は年々足りなくなっていくから、みなさんのような外の人に来てくれないと難しくなると思っています。これからは呼びかけを続けていこうと思います。



盆踊りって、人と人のつながりを
強くしてくれるものでもあるんですよ

石井さん

盆踊りを身をもって伝える 石川ヒデ子さんに聞いてみた

聞き手 史雨(中国)、玄心怡(中国)、陳乙尹(台湾)、
アダム・マンズル(イスラエル)、ハリス・ハフィジン・ビン・ノー(マレーシア)



毎年の盆踊りは
村の唯一の楽しみだった

——ヒデ子さんにとって、盆踊りとはどういうものですか？

石川 盆踊りは子どもからお年寄りまで楽しめるものだったの。お盆って先祖の供養なんだけど、昔は遊ぶところも、テレビも、お店も全然ないような時代だったから、じゃあ先祖のために踊りをやって、供養した方がいいんじゃないかということ。昔の人も始めたんだと思うんです。私にすれば、お盆はすごく楽しみだった。小さい子からおじいちゃん、おばあちゃん、若い男の人たちとか、村の人がみんな集まってきて、太鼓を叩いて、踊るといふことをずっと続けていたんです。私が生まれた頃からあってね。夜に太鼓がドンドンと鳴れば、親が用意してくれた浴衣を着て、下駄を履いて、そして踊りに出て行くのが楽し

みだった。もう、どの家もみんな出てきたもんね。

——楽しそうですね。どのように盆踊りを覚えたのですか？

石川 とにかく真似だね。母親も兄弟も隣のお母さんたちもみんな踊っていたから、それをとにかく見て覚えて。小さいときからやってるからね。山田に人が少なくなると10年も盆踊りをやめていたけれど、どうってことない。今、ドンって太鼓が鳴れば、ちゃんと踊れる。すぐまた復活できるのよ。それが私たちがやってる盆踊り。

——すごいですね！

石川 私たちは踊りが身体に染みついていて、今の若い人たちは踊りを知らない時代なの。今回盆踊りが復活するからって、私が教え役になって、こうやってやるんだよって手本を見せたりしている。ただ、太鼓を叩く人は男の人が中心なんだけど、若い青年の人たちがあんまりい

何年やめてても、今、ドンって太鼓が鳴れば、ちゃんと踊れる。すぐ復活できる

——石川さん

ないのよ。みんなおじいちゃんになってから、少しはやるけど、疲れるのが早い(笑)。それもちよつと悩みの種。

一生懸命努力することが
人の助けになる

——ヒデ子さんは石川理紀之助の分家にお嫁に来て、豊川に入ったんですよね？

石川 うちの父親がすごく農業が好きで、石川理紀之助を崇拜しているような人だったの。その父親から「おめえ行け」と言われて、来たわけ。それで1回だけデートをして、あとは結婚式が決まった(笑)。まあ、若いときは「いいな」って思う人もいたんだけどね。とにかく理紀之助さんの分家だから、家庭を守るために人一倍頑張ってきました。その内に村のみんなと仲良くなって、今では年いっただみんなもなるとか暮らせて、集まれるような雰囲気になって。「草木谷を守る会」にも協力して、この年まで頑張っています。——石川家の雰囲気はどんな感じですか？

ていたことって「とにかく辛抱しなさい」ということだと思っんです。お金はあるときに貯めなさいという。お金がないときに貯めようと思っても、満足に食べる物も食べないで貯まるわけないでしょう。昔であれば、怠けていけば何もできないから、とにかく一生懸命努力することがなにより自分のためになる。そして、そこで得たものを人にも教えてあげるといふ。そういうことを指導してきたように私は思います。当時は農業をやりたいくないような人もいたみたいだけど、自分が率先してやって見せて、「生活するためには怠けちゃダメだ」ということを身をもって伝えていたようです。

——今後、山田の盆踊りはどうなると思いますか？

石川 私たちの仲間は年いってらから、山田の村だけで考えたとしてもできない。隣の村、隣の隣の村、みなさんでもいいから、こうして集まって来てくれれば結構。一晩だけでも楽しめればいいかなって。どうか来年、あなた方来てください。ね？



石川理紀之助分家の跡継ぎの嫁として農業を一生懸命やってきたと、笑顔をやさずに語るヒデ子さん。初めて山田に来たときは、まだ牛や馬で田を起していたそう。そんな話を聞いて初めて、盆踊りが最大の娯楽だったという当時の空気に触れられたような気がしました



山田を引つ張るお嫁さんコンビ 石井アヤ子さん、 石川世希子さんを訪ねて

聞き手 繆瑾嫻(中国)、陳雲(中国)、鄒静文(中国)、
トウブシンバヤル・ノミン(モンゴル)



笛や太鼓の音に合わせ、
老若男女が和になって踊る

——アヤ子さんは夫の善春さんと、世希子さんは夫の紀行さんと一緒に様々な活動に関わられています。二人は子どもの頃から山田で盆踊りを？

石井 いや、私たちはどちらも外からお嫁に来た人間です。
石川 結婚したのは二人とも昭和50年前後だから、もう40年くらいかな。

石井 昔はこの地区でもお盆の季節になると盆踊りが行われていて、子どもたちはみんな参加していました。
石川 大人の踊りを見よう見まねでやりながら、自然に身につけていったという感じですね。

昔は本当に人が多くて、8月1日になると太鼓が鳴るんですよ。その音を聞くと「ああもうすぐだな」ってわくわくして、盆踊りの練習をしたりする。

石井 太鼓を叩いて笛を鳴らして、女の人や男の人、小さい子どもからお年寄りまでみんな輪をなして踊るんです。年齢も性別も問わず誰でもみんな踊る。それがかつての盆踊りでした。

——盛り上がっていたんですね。
石川 そうそう。盆踊りのときは基本的に浴衣を着るんですけど、今言うハロウィンみたいな仮装をするときもあったよね(笑)。

石井 あと、盆踊りには団体と個人があつて、それぞれ1等2等とか賞を決めたりもしていた。

石川 お盆は亡くなった人の霊が帰ってくる日で、灯籠は目印の光なんだけど、その歓迎のための踊りでもあったんです。
——それなのにどうして山田では盆踊りをやらなくなってしまったのですか？

石井 盆踊りには「その地域で亡くなった人がいると開催しない」という暗黙のルールがあったの。でもここ数年、高齢化の

みんなで一つの目標に向かうのは、 やっぱりいいな——石井さん

せいか毎年亡くなる方がいて、それでしばらく山田ではやらなかったんです。
石川 おじいさんおばあさんの二人暮らし世帯か、もしくはおじいさん、おばあさんの一人暮らし世帯が多いのが現状で、どんだん人が少なくなっている。ここいらはもう老人クラブだからね(笑)。

石井 でもそれじゃさみしいねってことで、去年から10年ぶりに復活したんだよね。
——盆踊りの復活をどのように感じましたか？

石井 実際は復活に賛成する人、反対する人、いろいろいたんだけど、でもやっぱり一つのものに向かつてみんなまとまってやろうという雰囲気はいいなと思いましたね。
石川 少しだけでも活気を取り戻したような、どこか懐かしい感じがしました。今回、山田に盆踊りを復活させようというので、みんなそれぞれがんばってね。話し合いもすごくして、時

伝えたい思いはあるけど、 子どもや若い世代がない

間をかけてきました。復活できて本当によかったと思います。
——一番楽しかった思い出は？
石井 やっぱ慰労会かな(笑)。終わって、賞品をもらって、一杯飲む。普段話せない人ともそこでは話せるし、あの雰囲気はすごくいいなと思いますね。
石川 盆踊りにはいい思い出がいっぱいあるんだけど、山田には若い人がいないから、それを伝えられないんですね。だから、こうして留学生のみなさんが来てくれるのは本当にうれしい。秋田の盆踊りを覚えたら、お祭りのときにでも他の友達にぜひ教えてあげて欲しい。そうそう、実は私も秋田大の卒業生なのよ。ずっと前だけどね(笑)。
——先輩だったんですか！ 秋田の言葉を教えて欲しいです。
石川 じゃあ「秋田さ、け」は？
石井 「け」は難しいかもねえ。この場合は「おいで」って意味なんだけど、「これ、け」って言ったら「食え」って意味だし、「ここ、け」だと「かゆい」になる。これをマスターしたら秋田弁の上級者かも(笑)。



石井アヤ子さん(左)、石川世希子さん(右)

インタビューというよりも、おしゃべりをしているかのように和気あいあいと話が進んだグループC。アヤ子さん、世希子さんがどんどん質問をくださったおかげで、盆踊りから、中国の祭り事情、料理、グループメンバーの日常生活まで話は大きく広がりました



覚えた踊りをぜひ友達にも
教えてあげて欲しい——石川さん

新しい盆踊りを復活させた

山田版・プロジェクトX

文 平田未季

最大の娯楽だった盆踊りが
開催困難になった理由とは

「ここにいるのはみんなが60歳以上で、今さら若者を呼び込む大がかりな町おこしなんてできない。しかし、せめて、今ここに住んでいる自分たちが楽しめることをしたい」

2014年秋、豊川の里山のふもとにある理紀之助ゆかりの集落、山田。広島から講師を呼び、まちづくりについて話し合っていた時に、一人の方がぼつりつぶやいた一言です。山田における盆踊りの復活はこの一言から始まりました。

盆踊りはもともと、盆に帰ってくる祖先の霊の供養、そしてその年の豊作を祈願するために始められたものですが、同時にそれはかつての農村における最大の娯楽でもありました。小田島清朗さん(あきた芸術村民族芸術研究所所長)によれば、朝から晩まで農作業に追われる村々において、人々は公然と何日も休むことができるお盆を心待ちにしており、各地に「盆の13日」正月から待ちた 待ちた13日 今夜は

り」という歌詞が残っているほどです。日が暮れ、太鼓の音がドンと鳴れば、お盆のメインイベント、盆踊りの開始です。太鼓の響きと軽やかな笛の音に誘われるように、親に着付けてもらった小さな子供から、若者、お年寄りまですべての人が集い、輪になつて踊る。普段とは異なり、凛々しく太鼓を叩く男性、しなやかに踊る女性。集落すべての人が集まる盆踊りは、実は若い男女の出会いの場にもなっていたそう。今で言えば「共同体験型婚活」ということになるのでしょうか!? 暗闇の中、灯りによぎる互いの姿に心をざわつかせる、盆踊りはそんな艶めかしい場でもあったのです。

しかし、日本のすべての地域を覆う少子高齢化、過疎化がそんな盆踊りに影を落とします。かつて青年会を中心とする若者が担っていた会場設営、太鼓の叩き手、笛の吹き手が消えてゆき、開催が困難に。さらに、「どうせ苦労して開催しても、集まるのはいつも顔を合わせているこの面子だけだろう」というモチベーションの低下。そこへ、集落で不幸があった年は盆踊りを開催

しないという集落の掟が最後の一打撃となります。今年はその人が亡くなったから、次の年はこの人が亡くなったから、そのうちに、盆踊りの準備をする習慣が途切れ、気が付けば数十年が経っている。山田も全く同じように、十年間盆踊りが開催されていない状態でした。

多彩なメンバーが集結し、
復活プロジェクトが始動!

「集落に住み続ける自分たちが生活を楽しまたい」。そんなつぶやきを形にするべく、2015年2月から復活に向けて数度の話し合いが行われました。復活の実行委員となったのは、山田の皆さんと秋田大学教育文化学部講師の植村円香さん、NPOはちろうプロジェクトの鎌田洋平さん「写真1」。話し合いに参加したメンバーは、プロのアシリテーター、大学生、デザイナー、公務員、劇団員、他地域の地域おこし協力隊などあまりにも多様! 山田の皆さんとメンバーが模造紙にそれぞれが思う盆踊りの姿をべたべたと書き綴ります「写真2」。「ハロウィンのよ

祝いの食事)で私たちをもてなしてくださいました「写真3」。

世界各国から集まった留学生が
田んぼに囲まれ、盆踊り・ハイ

そして迎えた2016年8月の盆踊り当日。盆踊りの輪を構成する半数が留学生! 留学生に盆の行事を体験させたいと、山田の皆さんがバスをチャーターして大学まで迎えに来てくださったのです。アジアを東から西へ、トルコを通り、南はアフリカ、北はヨーロッパ。なんと20地域以上の留学生が、田んぼの横で太鼓と笛の音に合わせ、1時間近く踊り続けました。輪の中にいる集落の皆さんの姿を必死に真似るものの、私も含めてその踊り姿はかなりユニーク……。最初は恥ずかしがる学生もいましたが、徐々に日が沈み、辺りが薄闇に包まれる頃にはもはや無私の境地。ぐるぐるととめどなく回り続けるお囃子に、学生も素人の笛部隊もつかえつかえしながら汗だくで追いつける、ランナーズ・ハイならぬ盆踊り・ハイ。小田島さん曰く、「踊りは文句なく楽しいものである」「踊っているうちに快感が全身に満ちる」。これは真剣に小一時間踊ってみなければ分からない感覚でした。突然ふっとお囃子が止まり、互いに顔を見合わせるとき、踊りをもにした連帯感と、何とも言えない達成感が沸き上がりました。田んぼを渡る涼風に気が付き、

汗を拭く私たち。後ろで興奮さめやらぬ学生たちが英語で話しています。「これで終わりですか? もっと踊りたい!」

10年ぶりに「復活」したはずの山田の盆踊りは、その準備過程といい、毎回メンバーが変わる実行部隊の自由さといい、当日のやたらに多様な参加者といい、耐久マラソンのようだった汗だくの踊りとお囃子といい、様々なものが入り混ざった「見たことのない盆踊り」でした。むしろ新たな前衛舞踊のようでした。山田の皆さんが「復活」させたかったものはこれで良いのか? :? 末席で参加させてもらいながら不安を覚え続けていましたが、皆さんの笑顔と「おもしろかった!」「またやろうよ!」という声が不安を吹き飛ばしてくれました。思えば、山田集落、ひいてはこの豊川という地は、理紀之助の教え、そして油田時代は多くの移民を受け入れ、多様性を是とし、その積み重ねを地域の文化として豊穣させてきたところなのです。復活した盆踊りがなんだか見たことのないものだったとしても、外からの人達を大きく受け入れ包み込み、すべてを我が物として昇華させていくというこの地域の本質は変わらないものなのかもしれません。「盆踊りの開催までは誰も死なないように頑張ろう」が山田の合言葉。来年はどのような祭りに進化していくのか。ますます目が離せません。

うに仮装を推奨!」「ヨーヨーの屋台がほしい」「よさこいのようにベストスマイル賞を決めては?」「地元中学生に合唱をしてみよう」等々、あまりにも自由! 実は秋田は盆踊り王国と呼ばれるほど、盆踊りが盛んな県であり、西馬首内、毛馬内の盆踊りは国指定重要無形民俗文化財に選ばれているほど。そしてこの山田の盆踊りも、形が大きく異なる種類の踊りを有しており、学術的にも非常に価値が高いそうです(26-27頁参照)。それなのに、こんなに自由に復活させてしまっているのでしょうか!?

復活二年目の今年はさらに自由。盆踊りの命である笛の吹き手。元わらび座団員の近藤先生「写真4」を師とし、2016年5月から練習を始めたメンバーは、山田集落の方1名、お隣の飯田川町の方が1名、青森出身の鎌田さん、岩手出身の三浦先生(26-27頁参照)、そして北海道出身の私。その半数が豊川どころか秋田出身ですらありません。田植後のちょこんとした苗がぐんぐん青く伸びていく傍らで、楽器の素養がない私たちの練習はまったくぐんぐん進まず「写真4」。しかし、山田の皆さんは、山田の盆踊りを踊ったこともない私たちが見よう見真似ならぬ聞き真似で大事なお囃子を奏でている様子をここにこそ見守ってくださいただでなく、練習の合間には、農村のお楽しみ「早苗ぶり」(田植を終えた



5

4

2

盆踊りの復活に貢献 川上秀子さんに聞いてみた

聞き手 宮本大道(日本)、フレルトゴ(韓国)、鄭鉉憲(韓国)、
魯靈(中国)、鄭鉉憲(韓国)



秀子さんは、結局最後までお囃子が上手にならなかったことが「すごく悔しい」とおっしゃっていましたが、試しに篠笛を吹いてみたところ、グループの誰も音を出すことすらできませんでした。「ね、難しいでしょ。来年は是非一緒に練習しましょう」と笑う秀子さん。来年の盆踊りでは留学生のお囃子部隊が誕生するかも!?

お囃子とか太鼓の音が聞こえてくると、 体がムズムズして踊りたくなった記憶があります

川上さん



体の中に染みついた 盆踊りの記憶

——今回盆踊りの復活に関わってみて、いかがでしたか？

川上 その年に亡くなった人の家族は踊れないとか、人が少なくなってきたとかで10年間もやめちゃっていたけど、今まですっと続いできたものだし、みんなの和を取り戻したいということでの復活の運動が始まりました。私は子どもの頃、お囃子とか太鼓の音が聞こえてくると、体がムズムズしてしてくるっていうか、踊りたくなったという経験があるんです。でも、今はなんにせよやり手がない。笛をやれたら素敵だろうなという憧れで私も練習を始めてみたけど、やっぱり難しくてなかなか指がつかなくて。すごく悔しかった。

川上 私たちもできるかな。

川上 ぜひ挑戦してください。まあ、地元だけでなく、こうや

山田に伝わる踊りを
しっかりと継承していく

——川上さんが復活運動に関わった山田の盆踊りとは、具体的にどのようなものですか？

川上 山田の盆踊りと言ってもまったくのオリジナルというわけではなく、ほとんど八郎湯町の「一日市踊り」と同じような形なんです。秋田市より北の湯上市、五城目町、八郎湯町、飯田川町辺りまで大体同じなんですよ。ちよつとずつ手の流れが違っていたりするんですけど、そこで生まれた人も嫁いで行く先が割と近いから、みんな同じような踊りになっているのかもしれないですね。

川上 男性は踊らないんですか？

川上 もちろん踊ります。でも、子どもの頃は男の子も女の子もみんなやっていたのに、大人になると恥ずかしくて踊らなくなる男性もいますね。男の人たちは太鼓を叩くことが多いかな。

川上 踊るときのポイントって何かありますか？

川上 地域によってこれも少し呼び方が違うんだけど、「ドド

ンガ三勝」という踊りがあります。あと、「キタサカ」と「ダガスコ」。方言を当てはめているような感じですね山田にある踊りはこの三種類。この中で難しいのは「ドドンガ三勝」かな。手を上に上げ、足を上げて……と体勢を維持するのが難しいんですよ(6-7頁参照)。山田には山田にずっと伝わってきた踊りがあって、私もそれを見て覚えながらやってきました。見よう見まねだとまた微妙に違う形になったりするんですけど、まずは正式な踊りを伝えていきたいなと思ってます。

——私たちも体験させてもらいました。難しかったけど、楽しかったです。

川上 女性はみんな浴衣を着てね。キレイだったね。好評だったもんね、今年ね。あと、踊ったあとにみんな食べたりのものも楽しかったね。

——焼きうどんとか、お好み焼きとか、ウインナーとか。鉄板でいろいろ焼いてもらいました。スイカもおいしかったです。焼きうどんを持って帰って学校の友だちと食べました(笑)。

って国際交流もできるような広がりのある会になったのは思った以上のことで、喜ばしいですね。例えば笛の師匠は、「わらび座」という秋田の劇団で演劇をやっていた方だし。家にいるだけだとただ日常が過ぎていくだけで、何も関係は生まれません。でも、今回盆踊りを通して地元の外にまで大きく関わられた。これが一番印象に残っています。

川上 川上さんはお姉さんが石川家に嫁いで行って、石川家の義妹として山田の活動に関わられているんですね。

川上 石川理紀之助は豊川の偉人なので、少しでもその活動を後世に伝えていけたらなと考えています。山田の人たちは地域のつながりがとても強いところなので、少しずつ世帯数は減ってきているけれど、これからも協力しながら地域を盛り上げていきたいですね。



“よそ者目線”で山田を活性化 鎌田洋平さんを訪ねて

聞き手 翁意丞(台湾)、劉権徳(台湾)、曾少鳳(中国)、孫嘉宏(中国)

ノートに図を書きながら、八郎湖とその干拓事業について説明して下さった鎌田さん。環境問題は他人事ではなく、皆熱心に図を書き写していました。県外から秋田に来て、地域の問題に関わろうとする鎌田さんの話が皆の刺激になったようです。と思いきや、最後には、青森の女性はリス顔ではという議論が熱く行われていました。中国では「青森顔」という女性の典型的な顔のイメージがあるそうです……!?



よそ者を受け入れる
山田からできたこと

— 復活プロジェクトに携わっている鎌田さんですが、元々盆踊りは好きだったんですか？

鎌田 実はいままで盆踊りってやったことなかったんですよ(笑)。もちろん知ってはいたけど、あまり関心のない子どもだったと思います。私は青森の出身なんですけど、縁あってたまたま秋田で関わった人たちと一緒に山田の盆踊りを復活させようとなって、この歳で初めて盆踊りすることができました。これはすごく自分にとってもいい思い出ですね。

— プロジェクトが始まったきっかけは何だったんですか？

鎌田 山田では高齢化が次第に進んで来ていて、若い人はほとんど出て行ってしまふ。たしかに盆踊りは伝統的な行事なんだけど、なかなか盛り上がりがないよねということも10年くらい開催されない状態が続いていた。でも、草木谷の人たちは田んぼを使った農業体験とかを積極的にやっていて、山田はいろいろ

な人が集まって来てくれる場所だったんですね。じゃあその集まって来てくれた人と一緒に盆踊りも楽しくできるんじゃないかなと思ったのが、そもそのきっかけです。その中で秋田大学の植村先生、三浦先生、平田先生といった人たちが力を貸してくださって、みんなとの繋がりで盆踊りが復活させられたのかなと思っています。

— 山田の盆踊りのおもしろいところはなんだと思いますか？

鎌田 昔やってた盆踊りをそのまま復活させようというのではなくて、そこにもっと人を集めてやろうとなったところですかね。普通の地域だと、結構外から来る人を嫌がる場所もあるから来るとは嫌なんです。だけど、山田の人たちは「草木谷を守る会」という活動をしてきたこともあり、外の人たちを受け入れることに対して心が広い。盆踊りに留学生を入れたらいいじゃないかというときも全然反対されなかったです。むしろ「そうならおもしろいね」と前向きに考えてくれた。こういうところが山田の盆踊りをユニーク

なものにしていると思います。

地元の人たちを元気づけ、
外の人をもたくさん呼びたい

— 鎌田さんが普段活動しているNPO法人「はちろうプロジェクト」について教えてください。

鎌田 豊川の流れて行った先にある八郎湖の環境教育に関わっています。この湖は昔と今でまったく変わってしまったんです。昔はとも水のキレイなところで、子どもたちがプール代わりに泳いでいたそうです。魚もいっぱいいて、ワカサギとかシジミとか、そういう湖の恵みが町の生活を支えていた。しかし、50年前の国策による大規模な干拓(湖を陸地にすること)の結果、アオコという植物プランクトンが大量に発生し、水質が汚染され、「危ないから近寄っちゃダメ」と言われる場所になってしまった。まだ解決策は見つかっていないんだけど、私たちは八

郎湖を大事な場所だと思っています。やっぱり地元の人たちの関心がなくなったら本当にどうしようもなくなっちゃうので、まずは子どもたちを連れて行くなど、学校で八郎湖ってこういうところなんだよと伝える仕事をしています。

— 県外から来た鎌田さんには山田はどのように見えますか？

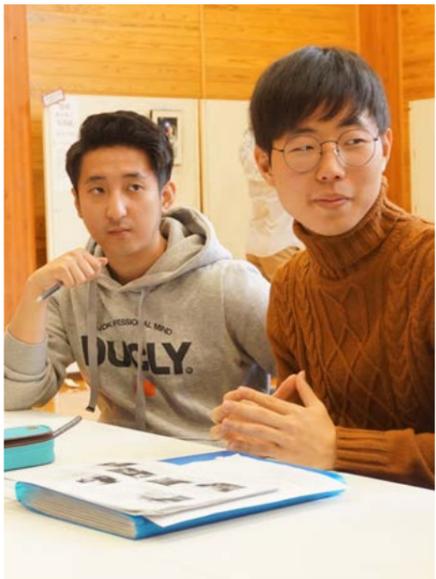
鎌田 盆踊りも八郎湖もそうなんですけど、環境が大きく変わっていて、不安に思っている人もいます。私は外から来たよそ者です。よそ者として3年以上関わって来て、地元では過疎とかアオコとか暗い話が多いかなと。ここを地元の人元気に出来るような場所にしたほしい。秋田は少子高齢化に関しては世界最先端なので、この問題を勉強してみたい留学生のみなさんにはぜひオススメですね(笑)。

やっぱり地元の人たちの関心がなくなったら、
本当にどうしようもなくなっちゃう

— 鎌田さん

豊川小出身の同級生女子 澤井万結さん、金子桃華さん、 佐々木佳乃さんに聞いてみた

聞き手 安在赫(韓国)、李在鎬(韓国)、
サヤン・ヴィラリン(フィリピン)、謝儀婷(台湾)



そもそも「組」って概念が
なかった——澤井さん



佐々木佳乃さん



澤井万結さん



金子桃華さん

いわゆる「田舎」に住むことの良いこと、自然、食べ物のおいしさ、家族のような学校、人と人との強いつながり、物々交換。ツマラナイこと、子どもが少ない、友だちが少ない、遊ぶところがない、そして、盆踊りはあまり魅力的ではない……。率直な意見は、今秋田に留学している学生が考えていることとどこか似ているのかもしれない

新しい校舎には
とりあえず感動した——金子さん



一学年6人の豊川小時代
授業も遊びも濃密な時間に

——みなさんは旧豊川小学校の同級生なんですよ。

澤井 そうです。全校生徒が43人で、みんな仲よかったです。

金子 私らの学年は6人しかいなくて、男子ふたりだけだったから肩身が狭そうだったよ。

佐々木 確かに(笑)。だから好きな人ができないんだよね。

金子 ずっと一緒にいるから、家族みたいになっちゃう。

澤井 先生がほぼマンツーマンで教えてくれたのは利点かも。

金子 全校で一緒に鬼ごっこことかしたよね。廊下で。

澤井 みんな顔見知りで、そもそも「組」って概念もなくて。

——それは経験者じゃないとなかなか想像できないね。運動会や修学旅行はどうしてたの？

澤井 運動会は全校生徒が赤組と白組に分かれてやるんだよね。そこに地域の人も参加して。

佐々木 修学旅行はないけど、校外学習っていうのがあった。

40人以上乗れる大きなバスに6人だけで乗って。

新しい校舎がキレイだったことにはとりあえず感動したよね。

若い世代が考える
盆踊りのこと、豊川のこと

——みんなは地域の盆踊りには参加したことある？

佐々木 小中学校のときは参加してたけど、その後は全然かも。

金子 住んでいるところが山田で、去年久しぶりに開催されたけど、私も参加してないです。

澤井 私の近所では盆踊りは行われてないからやったことないんだけど、小学校のときは練習したことあります。でも、忘れちゃったなあ。

佐々木 私は豊川の船橋地区に住んでるけど、ここは毎年やっています。チラシ配られてその日に自然と集まって、自然と解散していくって感じらしい。

金子 私は部活とかあって参加できてない。

——豊川はますます少子高齢化

金子 贅沢に席を使って、さすがに申し訳ないと思った(笑)。

佐々木 例年なら宮城県に行くんだけど、まだ震災から復興しなくて、北海道に行ったよ。

金子 何か学校行事がやたら多いんですよ。縄跳び大会、水泳大会、球技大会。それに夏祭りに収穫感謝祭に冬祭りも。

澤井 鍋っこもあったね。カラオケ大会では先生とかも歌って、すごい恥ずかしかった(笑)。

——豊川小学校がなくなると聞いたときはどう思った？

金子 やっぱリショックでした。

佐々木 でも、小学校入った時点で途中で統合するのはほとんど決まっていたから、しょうがないかなって感じはありましたね。

澤井 6年生のときに統合して大豊小学校になったけど、規模が全然変わった。あっちの学校は生徒が多くて、一気に一学年60人になったんだよね。途中で学校がなくなるのは悲しかったけど、新しい友だちがいっぱいできたのはうれしかったな。

金子 豊川小は老朽化してて雨漏りとか隙間風とかヤバかった。雪崩もあったし(笑)。だから、

が進んでいきそうですが、地元のことをどう思っていますか？

金子 めちゃ物々交換するよね。だから食に困った記憶がない(笑)。野菜、農作物、なすび、とうもろこし、大豆とか、いろいろ交換できるから助かります。

佐々木 お米にも困ることがない。自分のうちの田んぼで作っているから、お米が余るくらい。それこそ親戚にあげたり、ご近所さんにあげたり。

金子 精米器もある(笑)。

佐々木 そうやって交流するから住民同士もわりと話すよね。みんな顔見知りだし。

澤井 助け合っている感じがしているよね。確かに豊川は少子高齢化の典型的な感じなのかもしれないけど、この地域のいいところもたくさんあると思う。

佐々木 小学校のお花見給食は最高だったな。桜がキレイで、あれは豊川のいいところだよ。

小学校のお花見給食は 最高だったな——佐々木さん

「最新技術×伝統芸能」が示す 盆踊り研究の最前線

文＝三浦武

盆踊りの動きを
記録して
調べてみました！



三浦武／みうら・たけし
岩手県出身。秋田大学大学院理工学研究科数理・電気電子情報学専攻准教授。岩手大学大学院修士課程修了後、北海道大学で博士号(工学)を取得。専門は制御工学で、主に小形モータの制御法の開発に従事。現在は秋田県の民俗芸能の数値解析に興味を持つ

電子工学の技術で 盆踊りの動きを解析

豊川山田地区で伝えられてきた盆踊りは、それぞれの地域の民俗行事の中で傳承されてきた「民俗芸能」のひとつに分類されるそうです。「そうです」とは何とも持って回った言い方なのですが、実は私自身は、民俗行事や民俗芸能を扱う「民俗学」の研究者ではなく、現在は秋田大学で電気電子工学関係の分野を担当している教員で、民俗学は本来の専門から大きくはずれた分野なのです。

ではなぜ盆踊りに関わることになったのかと言えば、平成一七〜一九年度にかけて行われた研究プロジェクト「モーションキャプチャを用いた地域伝統芸能のデジタルコンテンツ制作に関する研究」のスタッフとして、いろいろな地域に伝わってきた民俗芸能の踊りの動きを「モーションキャプチャシステム」で記録し、工学の知識を生かして解析する担当になったからです。「モーションキャプチャ」とは何でしょう？ それは、身体の「モーション(動き)」を「キャプチャ(捕獲)」するため

動きをモーションキャプチャシステムで記録し、それをコンピュータグラフィックスのゴジラにあてはめたことが話題になりました。

このようにして盆踊りと関わることになったのですが、その研究を通じて、盆踊りそのものだけでなく、その傳承の背景も興味をわきはじめ、現在まで調査を続けています。ここでは、豊川山田地区で伝えられてきた「山田の盆踊り」について、研究活動の中でわかってきたことを少しばかり記してみようと思います。本来の民俗学研究者ではないにわか盆踊りマニアが書くことなので、そのあたり差し引いて読んでいただけると幸いです。

まず、「盆踊り」とはどういう踊りなのでしょう？ 盆踊りの起源には諸説あるそうなのですが、平安時代に現れた「踊り念仏」が、ご先祖様を供養する仏教行事の盂蘭盆会や各地域の民俗行事と結びついて、次第に現在のようになつてきたとしばしば言われています。秋田県内でも、数多くの盆踊りが現在まで傳承されているのですが、秋田県の民俗芸能の研究者が、とりわけ民謡についての功績から「秋田民謡育ての親」とも呼ばれる小玉暁村氏(二八八〜一九四二)は、それらを四つ

のグループに分類しています。一つ目は「鹿角踊系」のグループで、秋田県北東の内陸部に分布しています。腕をなめらかに右・左と交互に伸ばすゆったりしたリズムが特徴です。二つ目は「秋田音頭系」のグループで、伴奏音楽として秋田を代表するテンポの良いラップ調民謡「秋田音頭」が用いられますが、踊りそのものの動きは意外にもかなり優雅です。主に県南の内陸部の横手盆地のあたりでよく見られます。三つ目は「由利盆踊系」のグループで、県南沿岸部の現在で言えば由利本荘市に分布していましたが、二〇一四年の「秋田の祭り・行事改訂版」(秋田市教育委員会編、秋田文化出版発行)の中にはこの

地域の盆踊りが見あたりません。小玉氏の時代の昭和初期頃には盛んに踊られていたようですが、その後の時代までは傳承されなかったのかもしれませんが。

四つ目が、豊川山田地区を含んだ県北沿岸地域の旧南秋田郡(現在の男鹿市、潟上市、五城目町、八郎潟町、井川町)に分布する「南秋踊系」のグループです。小玉氏は南秋田郡を「盆踊の国である」と呼んでいます(「秋田郷土藝術」秋田県郷土藝術協會編・発行、一九三四年)。実際、他のグループだと、一つの地区で傳承されてきた踊りの演目数は多くてもせいぜい二つなのですが、このグループでは、中には踊りが五演目も踊られる地区もあるそうで、確かに盆踊り王国と呼んでも差し支えなさそうです。

中でも現在はこの踊りにしか見られない身体をひねって手を打つという振り付けがあります。江戸時代の紀行家の菅江真澄は、今から二〇〇年ほど前の南秋田郡の盆踊りについての記録を残しているのですが、その挿絵の中に、この振り付けに似たポーズの踊り手の絵がありました。もしかすると、豊川山田地区は江戸時代の南秋田郡の踊りのスタイルを現在に伝えている唯一の地区なのかもしれません。

盆踊りの研究をつたないながら続けてきてだんだんわかってきたのですが、たいいてい地域では、その地区の住民ではなくても、誰でも盆踊りを一緒に踊らせてもらえるようです。豊川山田地区でももちろん踊らせてもらえます。他の地域や他の国から来た人たちも、皆と一緒に踊れます。皆で踊れば、その地域の人たちも、他の地域や他の国から来た人たちも、皆が一緒に元気になると思います。古い時代から伝えられてきたこの貴重な「文化遺産」をぜひとも後世に元気に伝えていってほしいと切に願っています。

モーション解析でわかった 山田地区の 独自スタイルとは

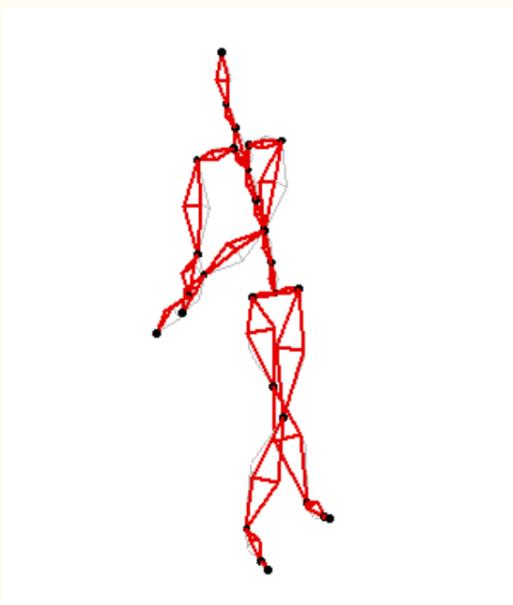
南秋踊系のグループに入る豊川山田地区の「山田の盆踊り」では、「キタサカ」、「ダガスコ」、「三勝」という三つの踊りが踊

られます。これらの踊りのモーションキャプチャ解析をしてみました。他のグループの踊りにはない面白い解析結果が出てきました。それは、三つの踊りが、三者三様にそれぞれ独自の動きのスタイルを持っているという特徴です。他のグループでも複数の踊りが踊られる地区はあるのですが、動きのスタイルはどれも似通っている場合がほとんどで、豊川山田地区を始めとする南秋踊系の地区だけが、全然違ったスタイルの盆踊りを一つの地区でいくつも伝えてきたようです。その原因ははつきりとはわかっていないのですが、このグループに属する五城目町の歴史を記した『五城目町史デジタルデータ』(五城目町史編さん委員会編、二〇〇五年)によれば、安土桃山時代にはこの地域に陶工や金工の技術者集団がたくさん移住してきたそうで、そのときに秋田以外のいろいろな地域の文化と一緒に流れ込んで豊かな民俗芸能のスタイルができあがったのかもしれない。

さらに、「山田の盆踊り」の「ダガスコ」踊りには、南秋踊系の



菅江真澄の「ひなの遊び」の挿絵/引用:「秋田の風景」(田口昌樹編、無明舎出版、2006年)の第28図



モーションキャプチャシステムで記録されたポーズ/「山田の盆踊り」の「ダガスコ」踊り、秋田大学「地(知)の拠点整備事業」の中で取得



豊川は自然に親しめるという面では良いところだと思います。これから、私たちもそれを発信していきたいです。

今後、豊川の上流部まで行ってみるとおもしろいかもしれません。小さい川にこれだけ多くの田んぼが広がっていることに驚くのではないかと思います。



Interview 6

三人の思い出話の中に、在りし日の旧豊川小を見ました

日本の高校生と話をしてみたい! そんな気持ちで私たちはこのグループに入りました。盆踊りについての質問も準備していたのですが、残念ながら盆踊りについての話はあまり聞けませんでした。情報量が少ないので、インタビューの結果をどのようにまとめるか悩みましたが、それが、現在の豊川の実情なんだと思い、「踊れない」「年に1回やるけど参加するのは高齢のおじいちゃんおばあちゃんがほとんど」という声をそのまま出しました。その代わり、かつて皆さんが通っていた旧豊川小学校についてはたくさん話を聞くことができました。地域の人が入り混じって行われた数多くの行事、春の桜、夏の蛍、そして冬の大雪。今はない小学校の風景を垣間見た気持ちになりました。[安在赫、李在鎬、サヤン・ヴィラリン、謝儀婷]

今回の報告会がなければ、自分も盆踊りについて考えることはなかったと思う。伝統の保存という意味で、留学生の受け入れは役立っている。

また、学生と活動をしたいです。

交流の場としてこれからも続けていければ最高です。盆踊りを通せばすぐ仲良くなれるものだなと思いました。



田んぼと油田

Interview 4

おうちの中でも国際交流!? ドラマの話でも盛り上がりました

お休みの日は何をしていますかと聞くと、ジャスコで買い物をしたり、家で孫と遊んだりと笑顔で答えてくださった秀子さん。孫の成長を見守るのが今、何よりの楽しみだということですが、今回の山田の盆踊り準備を通して、留学生や劇団の元座員など地域の垣根を超えて様々な人に関わったことがとても刺激的だったそうです。でも、インタビューの中で私たちが一番盛り上がった話は、中国のドラマ、韓国のドラマの話です。秋田と言えば『アイリス』のイ・ビョンホン! おうちの中でも結構刺激的な「国際交流」できますよね?! [宮本大道、フレルトゴ一・ホラン、魯靈、鄭鉉憲]



盆踊りは廃れてはいけないものかなと改めて感じました。盆踊りって何?という子どもが多くなっていくと寂しい...

留学生が山田の盆踊りを毎年体験することで、山田の盆踊りをずっと続けてほしいと思う。

Interview 5

子どもを巻き込んだ活動の重要性に気づかされました

とても明るく元気な鎌田さんがたくさん話してくださったので、私たちのグループのインタビューは他のグループより楽しかったかもしれません!? 盆踊りの話もさることながら、印象的だったのは、鎌田さんが環境改善に関わっている八郎湖の話です。八郎湖が以前は日本で2番目に大きい湖だったことも、1957年から田んぼを増やすため20年かけて干拓を行ったことも、本当に驚きです。しかし、干拓後、米の値段が下がり、また八郎湖の残った部分は水質汚染が深刻に。水質汚染は中国でも大きな問題です。汚染をすぐに改善する方法はないそうですが、小学生と共に水草を植えるなど、子どもを巻き込んだ活動は将来のために重要だと思います。アクティブな鎌田さんのお話にたくさんの刺激を受けました。[翁意丞、劉権徳、曾少鳳、孫嘉宏]

最終的に地球の人は1つになるべきだと思う。外国の皆さんとこうした交流を図り、少しでも平和・幸せにつなげていきたい。

豊川コミュニティセンターで行われた留学生による「豊川レポート」の発表会。地元のみなさんからも温かい感想の数々をいただきました!

日本の文化を深く知ってくれたことに感謝します。自国に帰ってから心に残してくれたら嬉しいです。



Interview 3

お二人の長年の友情に羨ましくなりました!

盆踊りについてインタビューをしているつもりが、気が付けば、私たちの出身のまちのこと、今の秋田の生活のこと、勉強、アルバイト、寮の部屋、将来の夢、いろいろなことを話してしまっていました。ほぼ40年前に豊川にお嫁に来たというアヤ子さん、世希子さん。私たちの話を聞いて、楽しそうに盛り上がるお二人は、きっと昔から変わらぬ友人同士なんだなと思い、羨ましくなりました。私たちがアルバイトしている中華料理屋に是非行ってみたいと言ってくれましたね。いつでもお待ちしております~! [繆瑾嫻、陳雲、鄒静文、トゥブシンパヤル・ノミン]

中国でもアオコ問題が起きていて、環境に関心を持ってくれて嬉しかった。



私は山田出身なので、子どもの頃の盆踊りを思い出して懐かしい気分になった。盆踊りの意義や、若者が参加しないことについて考えさせられた。



Interview 1

山田の盆踊り復活は、草木谷の活動の集大成

山田の町内会長であり、「草木谷を守る会」でも中心的な役割を果たしている石井さん。変わりゆく山田の中で、変わらない自然と田んぼの尊さを次の世代に伝えるべく、「田んぼの学校」を開いて、農繁期にも、子どもたち、秋田市の人たち、そして私たち留学生に土に触れる機会を提供してくださっています。去年、今年と、留学生を始め、様々な人たちが参加したという山田の盆踊り。石井さん、そして「草木谷を守る会」の皆さんの呼びかけに答え、多くの人たちが集まった盆踊りは、これまでの活動の集大成なのかもしれません。[沈鍾根、千歳文、李青松、羊小慧、王妍]



人口不足のため、豊川では、盆踊りはもうほとんどやられていないはず。山田をきっかけにして少し復活すれば幸いです。



Interview 2

まるでドラマのような人生……ヒデ子さんの姿に憧れました!

終始にこやかに話をしてくださったヒデ子さんですが、その内容はまるでドラマのよう。一度だけ会った人のところにお嫁に行き、まだ機械化が進んでいなかった当時の田んぼで理紀之助の名に恥じぬよう朝から晩まで働き続け、義両親もおうちで最後まで看取り……。自分たちにそんな生活ができるかな? そんな私たちの戸惑いを見透かすかのように、「今はもうそういう時代じゃないからね。もう、世界だもの。世界が、あなた方が山田に来るんだもの。私は隣の町からここにきましたというような、小さい地域で、今まで頑張ってきただけ。今は皆世界に羽ばたいていくんだもんね」。それでも、ヒデ子さんのように、「私は、一生懸命、農業しました」と言える人生に憧れます。[史雨、玄心怡、陳乙尹、アダム・マンズル、ハリス・ハフィジン・ビン・ノー]



留学生が盆踊りを体験し、楽しいと感じてくれたことが嬉しかった。でも、山田の子ども達がいなくて寂しい感じがした。

Rice Paddy & Oil Field



編集後記

今年度も各方面の皆さんの多大な支援により第3号発行にたどり着きました。特に、農繁期でも暖かく学生を迎えてくださる山田の皆さん、インタビュイーの皆さん、潟上市役所のご協力には本当に感謝です。豊川を訪れ始め早3年。今年は、春の田植え、初夏の笛練習、夏の盆踊り、秋の稲刈り、そして冬の日本酒醸造と、四季を通して学生とともに豊川の自然を満喫しました。その中で学生が撮影した1枚を集め「留学生が見つけた豊川の魅力」写真展を開催。被写体は、理紀之助の遺跡、油田施設、石碑から、道端の柿、稲穂、蜘蛛まで実に様々でした。「お気に入りの1枚を選んでください」と投票箱を設置したのですが、約50名の方々が投票した1枚も見事にバラバラ！結局、大賞は決められず。それだけ豊川が多様な魅力を抱えた地だということでしょう。これからもその魅力発信に微力ながら尽くしていきたいです。〔平田〕

この冊子も3号目になりますが、豊川を「盆踊り」という視点で切り取った今号は、これまでと違った角度の内容になったのではないかと感じます。一人ひとり、また世代によって記憶や距離感の違いが浮き彫りになり、とてもおもしろかったです。個人的には……子どもの頃から盆踊りは苦手でした(笑)。自意識過剰でお祭りに参加できなかつた過去を乗り越えるべく、いつか参加してみたいです。〔清田〕

盆踊り。そういえばと思い出してみると、ありましたねぼくの地元にも。近所の小さな神社で、小さな櫓を囲んで、付近の住民がそろそろ集まって……。石川ヒデ子さんの話にもありましたが、こどものときの経験というのは体が覚えているもので、踊ってみるとそれなりにできるんですよね。そうそう、この大山のぶ代さんの歌声、覚えているなあ。懐かしいなあ。……最高だな、「ドラえもん音頭」。〔ウ〕

田んぼと油田

通算第3号

発行日	2017年2月1日	写真	秋田大学写真部(堀江瞬、井ノ山裕貴、鎌田貴文、高橋千帆、杉山穂奈美、頓部真大、細田玲、吉田菜、CIRINEO AVRIEL VENISLITERAL)
発行	秋田大学 国際交流センター 〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 電話 018-889-2258 ファックス 018-889-3012 http://www.pcix.akita-u.ac.jp/inter/	イラスト	平田早季
企画	平田未季(秋田大学国際交流センター) 秋田大学教養基礎科目「日本社会入門II」を受講した学生26名	協力	山崎達也(秋田大学教育文化学部) 戸巻志穂(秋田大学教育文化学部) 船橋恒(秋田大学医学部) 神亜沙美(秋田大学医学部) 鈴木愛美 潟上市
企画協力	三浦武(秋田大学大学院理工学研究所)	Special Thanks	「草木谷を守る会」 「豊川油田の歴史を伝える会」
編集	清田隆之	印刷・製本	株式会社山田写真製版所
執筆協力	中沢新		
デザイン	ウチカワデザイン		
デザイン協力	望月美憂		

留学生と出身地域

沈鍾根(韓国)、千歳文(韓国)、李青松(中国)、羊小慧(中国)、
王妍(中国)、史雨(中国)、玄心怡(中国)、陳乙尹(台湾)、
アダム・マンスル(イスラエル)、ハリス・ハフィジン・ビン・ノー(マレーシア)、
繆瑾嫻(中国)、陳雲(中国)、鄒静文(中国)、
トゥブシンバヤル・ノミン(モンゴル)、
宮本大道(日本)、フレルトゴー・ホラン(モンゴル)、魯靈(中国)、
鄭鉉憲(韓国)、翁意丞(台湾)、劉権徳(台湾)、
曾少鳳(中国)、孫嘉宏(中国)、安在赫(韓国)、
李在鎬(韓国)、サヤン・ヴィラリン(フィリピン)、謝儀婷(台湾)

*グループ順

*本誌内容の無断転記、記載、複写はご遠慮ください。
*本誌は文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に助成を受け、
国立大学法人秋田大学国際交流センターが制作・発行しています。
©Akita University International Exchange Center / 2017

Feb. 2017

